平成２４年度 8020 公募研究報告書抄録

研究課題：垂直歯根破折の原因と接着治療の臨床成績に関する調査研究

研究者名：菅谷　勉、元木洋史、中塚　愛、佐藤賢人
所　　属：北海道大学大学院歯学研究科口腔健康科学講座歯周・歯内療法学教室

抜歯の原因はう蝕と歯周病がほとんどを占めるとされてきたが、今後は歯根破折が増加すると考えられる。本研究では、垂直歯根破折した症例を分析し、臨床における歯根破折の実態と原因因子を検討し、さら垂直破折の接着治療を行った症例を対象に、予後や歯周組織の改善状態、術前の歯周組織の状態と予後との関連、予後不良で抜歯した歯の原因か調べ、再破折について分析を行った。

北海道大学病院歯周・歯内療法科で垂直歯根破折と診断された歯を対象として、後ろ向きに調査を行った。調査項目は、患者の年齢、性別、歯種、破折状態、ポストの状態、根管充填状態とし、接着により治療を行った歯では、さらに術前術後のプロービングデプス、骨欠損状態、補綴方法、経過日数を調べ、予後不良で抜歯した場合にはその原因も調査した。

被験歯は 250 名（23～84 歳、平均 55.6±11.3 歳）の 305 本であった。垂直破折の発生頻度は上顎小臼歯、下顎大臼歯の順で多く、う蝕罹患率の高い歯種が必ずしも歯根破折を生じやすいわけではなかった。歯頸部破折（歯頸部に破折があって根尖部には破折がない）は上顎中切歯と犬歯では約半数を占めていたが、他の歯種では歯頸部破折と根尖部破折（根尖部に破折があって歯頸部には破折がない)、全部破折（歯頸部から根尖部まで破折がある）は概ね同程度であった。歯頸部破折では破折方向に一定の傾向は認められなかったが、根尖部破折は頬舌方向に破折する歯が大多数であった。ポスト材質は破折部位によって大きな差は見られず、ポスト長は長い方が根尖部破折は少なかった。根尖と根管充填材の距離は破折部位により大きな差はなかった。

接着治療を行った 231 歯のうち、39 本（16.9%）が予後不良により抜歯やヘミセクションとなった。術前に骨欠損が認められプロービングデプスが４㎜以上の場合は、５年後の生存率は 64.6%であったが、その他の症例では 82.6%であった。術前にプロービングデプスが深く骨欠損が生じていると、生存率が低下するだけでなく術後に深いポケットや骨欠損が残存することも多かった。したがって、垂直歯根破折の治療を成功させるためには、歯根破折を早期に発見して、歯周組織破壊が進行する前に治療を開始することが重要と考えられた。また、予後不良歯の抜歯原因は再破折が最も多かったが、再破折症例は全体の 6%程度であったことから、ポストを接着することは破折予防としても効果が期待されると思われた。